

## 施設介護実習における教員・学生の評価から見た学生の目標到達度

三上 ゆみ\*

地域福祉学科

(2008年11月12日受理)

介護福祉士養成過程において現場実習の役割は、講義、演習で学んだ知識に基づいて利用者との関わりを深め、利用者の求めている介護の需要に関する理解力、判断力を養いチームの一員として介護を遂行する必要性や多くの体験を積むことが出来る。本研究は、介護実習終了後、教員による担当学生の評価と、学生による各実習の評価表に基づいて自己評価の分析を行い今後の実習指導の課題を明らかにすることを目的に行った。結果、実習は、基本的な日常生活の援助の体験を擦ることが出来、利用者の介護の必要性を学習する場となり、学生は段階実習を重ねるごとに高い到達が得られている。学生と教員の評価を比較すると、学生の方が低く付ける傾向にあり、学生は学習の結果を考察し文章にすることを目標達成が不十分、難しいと感じている。記録について観察力をつけること、他者の記録を読むこと、書く習慣をつけることなども重ねて指導を行っていきたいと考える。また、介護実習の目標に対して、目標が達成できていても、学生の自己評価が低いことから目標に対しての自信のなさが伺えた。今後学生の学習達成度と学生の自信につながる実習指導を検討していく必要があることが示された。

(キーワード) 教員評価、学生評価、介護実習、到達度

### はじめに

平成21年度より、介護福祉士養成課程の見直しと、実習基準の見直しが行われ、介護福祉士の「介護」に対する定義規定について「入浴、排泄、食事その他の介護」から「心身の状態に応じた介護」に改められ専門知識・技術において判断が求められ、生活を支える視点やその人の感情と言った精神状態についての理解、あるいは援助技術を統合した判断が求められている<sup>1)</sup>。本学では、質の高い介護サービスと個別ケアを目指して介護過程を平成10年後の開設より実習目標に取り入れている。

学生の実習目標に対する到達度について、実習後の教員の実習目標ごとの評価と、学生自身の自己評価を用いて、傾向を明らかにし、今後の実習指導に生かすことを目的に調査を行った。

自己評価のもたらすものとして梶田<sup>2)</sup>は、自分自身の振り返りの機会となり、自分自身のあり方を分析的に検討し、多面的な自己理解に導かれる、としている。そして、学習者自身の目標達成度の自己評価を、達成・未達成と認識し、内的基準満足度を満足・不満足と認識することから、学生の実習目標に対する、達成感、満足感を推察出来ると考えた。また教員のがわの評価からは、到達基準から、客観的な評価が得られ学生と教員の実習後の評価を分析することは効果的と考えた。

### 1. 調査目的

実習後実習評価を用いて、教員の評価表と学生の自己評価表を分析することにより、各段階の実習目標における学生の到達度と、学生自身が難しい、困難だと感じている実習目標を明らかにし今後の実習指導のあり方の参考とする。

### 2. 研究方法

- 1) 調査対象：A短期大学地域福祉学科における平成18年度地域福祉学科入学生55名と介護実習教員6名における1-3段階実習
- 2) 実習概要：介護福祉士養成2年過程450時間10単位  
1年次1段階90時間、2年次2段階180時間と3段階180時間（うち在宅実習45時間を含む）の合計450時間  
(表1参照)
- 3) 実習期間：平成18年10月～平成19年11月
- 4) 調査方法：介護実習終了後、教員による担当学生の評価と、学生は各実習ごとの評価表に基づいて自己評価を行った。評価表は、両者共に各実習段階の目標に沿って1段階は8項目、2段階は9項目、3段階は5項目の同じ項目について「4：よくできる」「3：大体できる」「2：不十分ながらできる」「1：殆どできない」

\*連絡先：三上ゆみ 地域福祉学科 新見公立短期大学 718-8585 新見市西方1263-2

の4点法で行った。評価表のCronbach's  $\alpha$  信頼分析係数は0.7~0.8であった。

5) 分析：分析には統計ソフトSPSS11.5 for Windowsを用いて行った。

6) 回収率：1段階学生44人(80%) 教員評価44人(80%)  
2段階学生45人(81.8%) 教員55人評価(100%)  
3段階学生44人(80%) 教員47人評価(85.4%)

表1 実習概要

実習段階	期間	施設概要
I段階	1年後期 (2週間)	介護老人保健施設、介護老人福祉施設、身体障害者療護施設、救護施設
II段階	2年前期 (4週間)	介護老人保健施設、介護老人福祉施設、身体障害者療護施設、救護施設
III段階	2年後期 (施設3週間+在宅実習を1週間)	介護老人保健施設、介護老人福祉施設、身体障害者療護施設、救護施設、社会福祉協議会、ホームヘルプステーション

### 3. 倫理的配慮

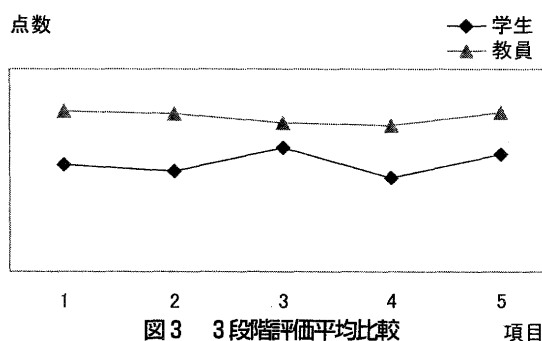
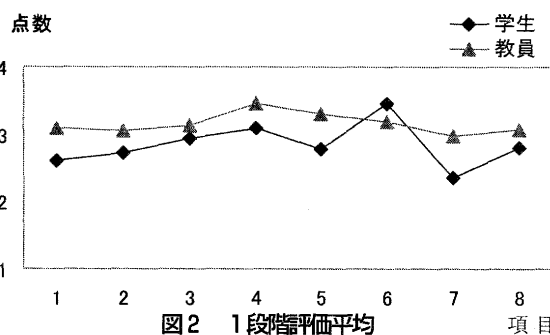
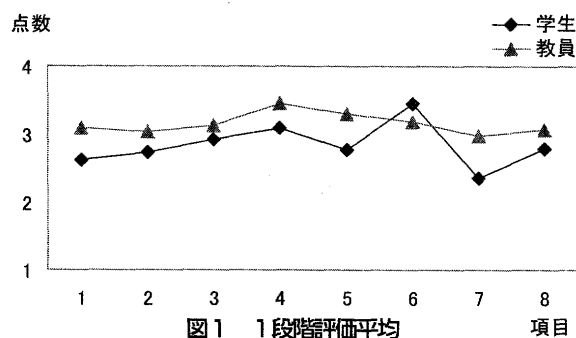
本研究の趣旨を当時学生本人に文章にて説明を行い、調査で出たデータは、個人が特定されないよう統計的に処理を行うことの説明を行い同意を得た。教員については口頭で説明を行い同意を得た。

### 4. 結果と考察

学生の1段階評価の学生評価平均は2.84 (SD0.15) 教員は3.15 (SD0.32) であった。II段階評価平均は学生2.72 (SD0.09) 教員3.16 (SD0.22) であった。III段階は学生2.26 (SD0.97) で教員は3.29 (SD0.18) と全体的に教員のほうが評価が高い(表2)。実習段階ごとの教員と学生の項目平均値に差が見られるかについて、t検定を行った結果、5%水準で有意差が見られ項目22に対して18項目で優位に教員の評価が高かった。各段階ともに教員と学生の評価の平均に差はあるものの、教員が高いと感じている項目では学生も同様に評価が高く、教員が低いと感じている項目について、学生も低いと感じている項目が多く見られた。(表2・図1~3参照)

表2 実習段階別評価平均

	教員 (M±SD)	学生 (M±SD)
1段階	3.15±0.32	2.84±0.15
2段階	3.16±0.22	2.72±0.09
3段階	3.29±0.18	2.6±0.97



#### (1) 1段階

「4:よくできる」「3:大体できる」と答えた項目として、項目④の「基本的な日常生活の援助の体験をすることが出来る」について、学生が35人(81.4%)、教員評価は42人(95.5%)と高い評価であり、項目③の「利用者の介護の必要性が分かる」では学生は32人(74.4%)と高かった。1段階の実習は学生が初めて介護現場を体験し、学内で学習したことを利用者を通して実践を経験する場所となっている。

項目⑥の「チームワークの必要性を理解する」については、学生は「4:よくできる」「3:大体できる」と答えたものが44人(95.5%)平均3.4に対して教員32人(75%)平均3.18と逆転が見られる。学生の理解と教員の求める達成度にずれがあることが伺える。

「2:不十分ながらできる」「1:殆どできない」と答えが多い項目を見てみると、学生は項目⑦「学習の結果を考察し文章にすることが出来る」が29人(66.4%)で最も多く、次いで項目①の「利用者および利用者を取りまく

施設介護実習における教員・学生の評価から見た学生の目標到達度

人々と援助的人間関係を成立発展することができる} については、18人 (40.9%) が高く、学生は不十分と感じている。学生は記録に行ったことや振り返り文章化することに不慣れであり、また、利用者とのコミュニケーションにも戸惑いを感じていることが、この結果から伺える。(図4・図5参照)

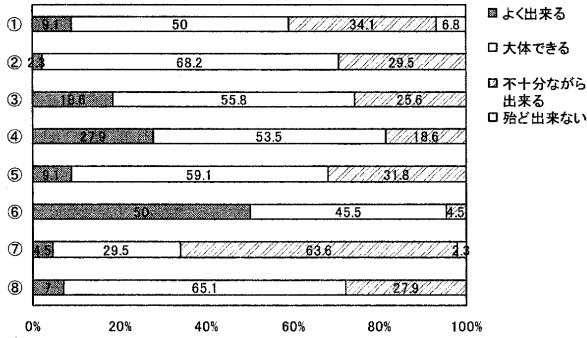


図4 1段階学生評価

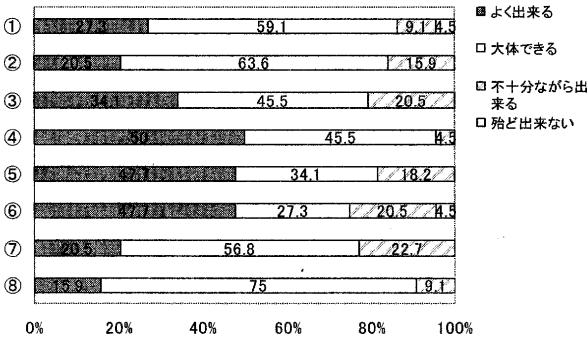


図5 1段階教員評価

(2) 2段階

2段階の評価として、「4：よくできる」「3：大体できる」項目に、項目②の「利用者の介護に必要な情報を集めることができる} について学生は35人 (77.4%)、教員は49人 (90.7%)と高かった。このことは既に前回の1段階実習で利用者の情報収集を行った経験から、情報収集について力が付いてきており学生教員共に目標達成できたと感じるものが多かったと考える。

「2：不十分ながらできる」「1：殆どできない」と答えた学生は、項目⑧の「学習の結果を考察し文章にすることができる} の31人 (70%) で最も多く、次いで項目⑥の「実践結果の評価が出来る} が19件 (43.2%)、項目③の「情報をアセスメントし介護問題を明確にすることができる} では16人 (36.4%) と多く学生は不十分と感じている。教員の評価を見てみると「2：不十分ながらできる」「1：殆どできない」が項目⑥の「実践結果の評価が出来る} が14人 (25.9%) 項目③の「情報をアセスメントし介護問題を明確にすることができる} が14人 (25.9%) と同じように不十分と考えている教員が多くみられた。しかし学生が2段階で最も不十分と考えている項目⑧の「学習の結果を考察し文章にすることができる} を見てみると、教

員の評価では、「2：不十分ながらできる」「1：殆どできない」は9人 (16.6%) で「4：よくできる」「3：大体できる」35人 (83.4%) と差が大きく実際達成できているが、学生は介護過程の進行状況に沿った実習展開の中で、情報の分析や評価と言った新しい課題の習得について不十分、難しいと感じていることが伺える。(図6・図7参照)

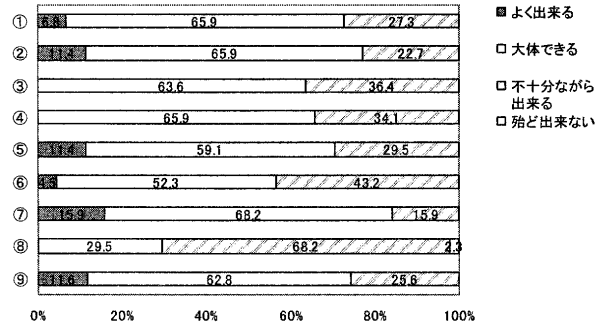


図6 2段階学生評価

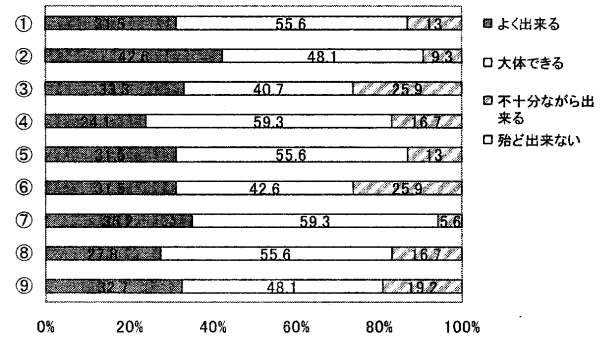


図7 2段階教員評価

(3) 3段階

3段階の評価として、「2：不十分ながらできる」「1：殆どできない」と答えた学生が、項目④の「学習の結果考察し文章にすることができる} では26人 (60.4%)、次いで項目②「介護過程の展開が本人主体であることを理解し、より個別的に展開をすることができる} の22人 (51.2%)、項目①「利用者および利用者を取りまく人々と援助的人間関係を成立発展することができる} が21人 (48.8%) と多かった。教員の評価を見てみると、項目④は「2：不十分ながらできる」「1：殆どできない」と答えた教員は7人 (10.8%) 逆に「4：よくできる」「3：大体できる」39人 (84.8%)と評価を行い、項目②については「2：不十分ながらできる」「1：殆どできない」が4人 (10.8%) 逆に「4：よくできる」「3：大体できる」32人 (89.1%)と言ったように、これらの項目は、学生の評価と教員評価にずれがあることが伺える。(図8・図9参照)

(4) 共通項目

各段階の共通の項目①「利用者および利用者を取りまく人々と援助的人間関係を成立発展することができる} では教員評価は、「4：よくできる」「3：大体できる」

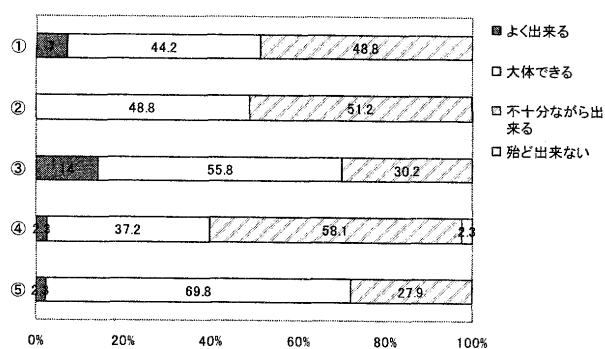


図8 3段階学生評価

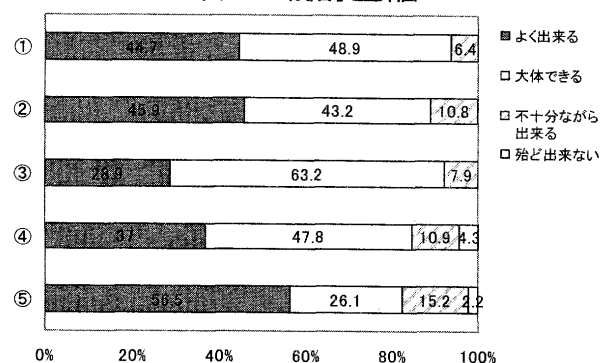


図9 3段階教員評価

と答えたものが、1段階では38人(86.4%) 2段階37人(87.1%) 3段階44人(93.6%)と言ったように段階を追うごとに高くなっている。

(図10～図12参照)

1段階では項目⑦、2段階は項目⑧ 3段階では項目④の「学習の結果を考察し文章にすることができる」及び、1段階項目⑧と2段階項目⑨と3段階項目⑤の「自己の実習結果を評価し今後の課題を明らかにできる」についても評価点が、各段階を追うごとに教員は高くなっている。

しかし学生の評価平均を見てみると、各段階の共通の項目①「利用者および利用者を取りまく人々と援助的人間関係を成立発展することができる」について、1段階では2.61、2段階2.79と高くなったものが3段階では2.58に下がる。また「自己の実習結果を評価し今後の課題を明らかにできる」についても同様に1段階より2段階で平均があがるもの3段階では下がる傾向がある。太田<sup>3)</sup>は振り返りの過程で得られる気付きは深ければ深いほど、より確かな学習効果へとつながる、述べているように、3段階では学生が実習の評価、修正を行う中で、より個別的な援助的人間関係の難しさや、多くの気付きを感じているのではないかと考えられる。

「2：不十分ながらできる」「1：殆どできない」1段階では項目⑦「学習の結果を考察し文章にすることができる」が29人(66%)で多く、2段階では⑧の同じ項目で31人(70.5%) 3段階の④同項目で26人(60.4%)と多く、学生は不十分、難しいと感じている。学生は、特に記録

にあらわすことを不十分、出来ないと考えているものが多いが、教員は、1段階では主に利用者の情報やコミュニケーションを中心に学び、2段階では介護過程に沿った立案・実践・評価、3段階では、さらに個別的な展開を求めため、各段階における介護過程の進行度や学生の学習過程から、各段階に達成度としての評価は高くなっている。このことは、介護過程が実習を通じて段階的に効果的に学習できていると言える。しかし実際に目標達成が出来ていると教員は判断をしても、学生の評価が低いことは、学生の自身無さが伺える。梶田<sup>4)</sup>は、自己評価を上手に活用するならば、効力感とか達成感とかいった肯

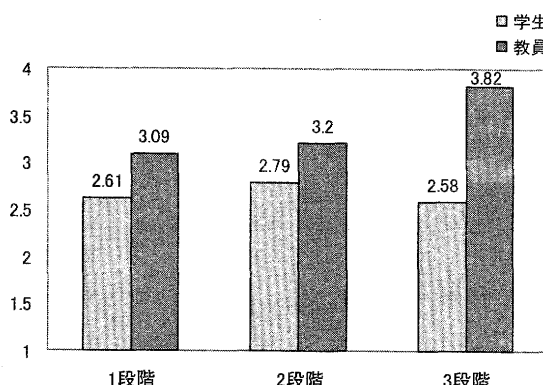


図10 利用者及び利用者を取りまく人々と援助的人間関係を成立発展することができる

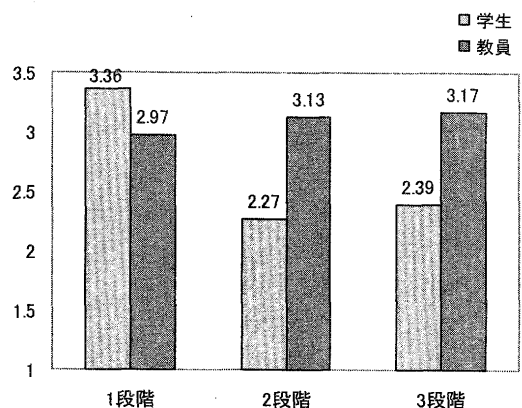


図11 学習の結果を考察し文章にすることができる

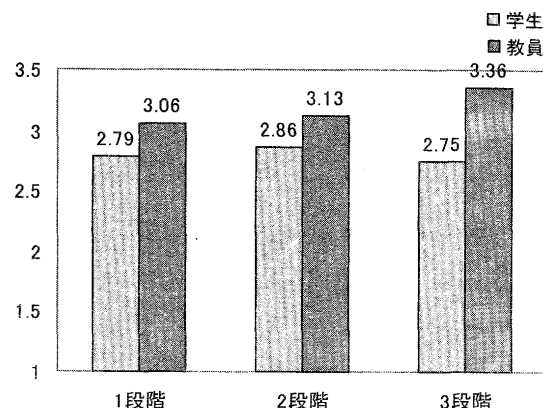


図12 自己の実習結果を評価し今後の課題を明らかにできる

定的な自己感情を育てていくことが出来る、としており、効力感を持たせるような指導が必要であり、今後の課題である。

1段階の項目⑥の「チームワークの必要性を理解する」や2、3段階の項目である「介護職の役割と他の専門職の役割の違いがわかり、連携の必要性が理解できる」については、学生と教員の平均に逆転や平均の差が小さくなる。学生の理解と教員の求める達成度にずれがあることが伺える。チームワーク、他職種との連携について学生の自己評価が高いが、教員が高いと感じていないことについては、学生がイメージする連携は、実際介護現場で見えるものに限られてしまうため広い意味での職種間やサービスの連携と言ったものが実感できないのではないかと考えられ、社会資源や家族を含めた広い意味での連携を学生が学べるように指導していく必要がある。

自己評価の意義について、肥田野<sup>3)</sup>は、自己教育力は主体的に学ぶ意欲・態度・能力を統合した概念で、これを養うに(1)学習への意欲を高め、(2)学習の仕方を習得し、(3)生涯にわたって学習への意欲を高め、(4)学習の仕方を習得し、(5)生涯にわたって学習を主体的に続ける意思形成をすることが必要であると述べている。実習後に学生自身自己評価を行うことは、学習目標に対しての達成度の点検と自分自身の課題が明らかになる。

## 5. 結論

本調査から以下のことが明らかになった。

- ①学生と教員の評価を比較するとは、全体に学生の方が低く付ける傾向にあった。
- ②連携やチームワークの理解では、教員が求める達成度と学生の達成度に学生の方が高い。
- ③学習の結果を考察し文章にすることを学生は目標達成が不十分、難しいと感じている。
- ④実習は、基本的な日常生活の援助の体験をすることができ、利用者の介護の必要性を学習する場となっている。
- ⑤共通項目において、教員評価から、学生は段階実習を重ねるごとに高い到達が得られている。

本調査から、介護実習の目標に対して、目標が達成できていても学生の自己評価が低いこと分かった。このことを踏まえ、学生の学習達成度と学生の自信につながる実習指導を検討していく必要がある。学生が記録を苦手と感じていることに対しては、段階ごとに力をつけてはいるが、観察力をつけること、他者の記録を読むこと、書く習慣をつけることなども重ねて指導を行っていきたいと考える。

## 参考文献

- 1) 日本介護福祉士会編集：介護福祉士の教育のあり方に関する検討会報告書、2007
- 2) 梶田叡一：「教育評価」財団法人放送大学教育振興会、P119, 1998
- 3) 太田圭子：利用者とうまくかかわるコミュニケーションの基本、基礎から学ぶ介護シリーズ、中央法規出版、p18, 2007
- 4) 梶田叡一：前掲書 p122
- 5) 肥田野直：「教育評価」財団法人放送大学教育振興会、p16, 1987